

老舗の底力

2013年が幕を開け、県内企業の新たな成長、生き残りをかけた1年が始まった。日本経済の先行きに依然、不透明感が漂う中で、この福井からいかに未来をみつめ、確かな歩みを進めるのか。手がかりの一つとして本紙が注目するのが、県内で創業100年を超える老舗企業の多さだ。その数は400社を超え、企業全体に占める割合でも都道府県別で全国上位にある。戦争、震災、バブル崩壊と幾多の困難、荒波を乗り越えながら業績を伸ばし成長してきた企業も多い。その戦略、経営哲学は何なのか、持続可能性のキーワードとは。

山田兄弟製紙

越前市 1882年創業



【写真①】「時代の先端を歩むことへのあこがれ」こそが社会の変化を乗り越え、時代を切り開くと強調する山田社長。現在はヨシを原料にした製品開発に取り組む越前市の山田兄弟製紙の倉庫

【写真②】ヨシをパルプに加工して作り出した名刺用紙(中央上)などの製品



越前市今立地区。1500年の歴史を誇る越前和紙産地の一角の倉庫には、天井まで届きそうな背の高い植物の束がぎっしりと立てかけられている。大阪

の淀川で刈り取ったヨシ。山田兄弟製紙(本社は同市不老町)4代目の山田晃裕社長(48)が「時代の切り開く新しい手法」と位置づける和紙の原料だ。創業は1882明治15年。

次の活路は環境

一般的な和紙や葉袋などの手漉しから始まり、昭和には機械化の製造にも着手、成長した。とりわけ、特殊な透かし技術を生かした株券の生産は、一時は同

時代の先端歩みたいというあこがれが切り開く

社を含め同産地の5社が国内市場企業数の95%の発行をまかなうほどに活況を呈した。しかしバブル崩壊を経て、近年は電子化の波が襲いかかる。株券は2009年に完全電子化。売上げの柱がゼロになる。どうすれば……(山田社長)と悩む厳しい局面に立たされた。巻き返しに向け、他社にはない切り口として力を入れているのがヨシを原料にした和紙。01年に手掛けた当初は、琵琶湖や淀川の取原保全のため刈り取ったものを有効活用できないかとの相談を受けてのもので、半ばボランティアで研究開発に取り組んだという。しかし06年以降、大手文具メーカーなどからOEM(相手先ブランドで生産)依頼などが来始めた。保全活動に取り組む人のつながりで、岡山・児島湾のヨシを素材にしたシーバンの商品札や、長野・志賀高原の絵はがき用に、といった注文も寄せられるように。「環境」がビジネスになる時代」と期待する。独自に名刺用紙などの商品も開発。今や売上げの1割を占める。屋号の「久兵衛」ブランドで越前和紙の端材、規格外品を使った商品も手掛け、売れ行きは好調だ。戦後、大量受注への対応が問われたときは手漉きから機械へ、株式市場の活況を迎えたときは、株券へと生産をシフトさせてきた。転換期を乗り越え今がある。「どの場面でも」うちもこれをした」といってエネルギーがあったと山田社長。「時代の先端を歩むことへのあこがれ」が局面を切り開いてきた。(山内孝紀)



耐熱性を高めたIH対応の食器を手にする下村社長。「顧客が求めている機能は何か」を念頭に、ものづくりへの探究心は尽きない。鯖江市戸山町の「下村漆器店」

IH調理に耐える漆塗り

面白いもの見

1400年の歴史を持つ。越前漆器産地、鯖江市。その過程で「伝統」河和田地区で1900年。尊重しつつも時代に合(明治33)年に創業した。た機能を取り入れた製下村漆器店(本社鯖江市)の開発に取り組む。近片山町、下村昭夫社長)は耐熱性を高めたIHは、漆器の材料となる木(電磁誘導加熱)調理材の販売が出发点。その食器を市場に出す後、料亭などの高級旅館に、同社の113年の外食産業向けのプラスチック。遷は変化に富んでいる。ツク製食器製造へと歩み。IH調理は150度

下村漆器店

鯖江市

1900年創業